



君は被災地を見たか!?

平成30年度 日本災害医療実地研修

JAPAN DISASTER MEDICAL HANDS-ON TRAINING

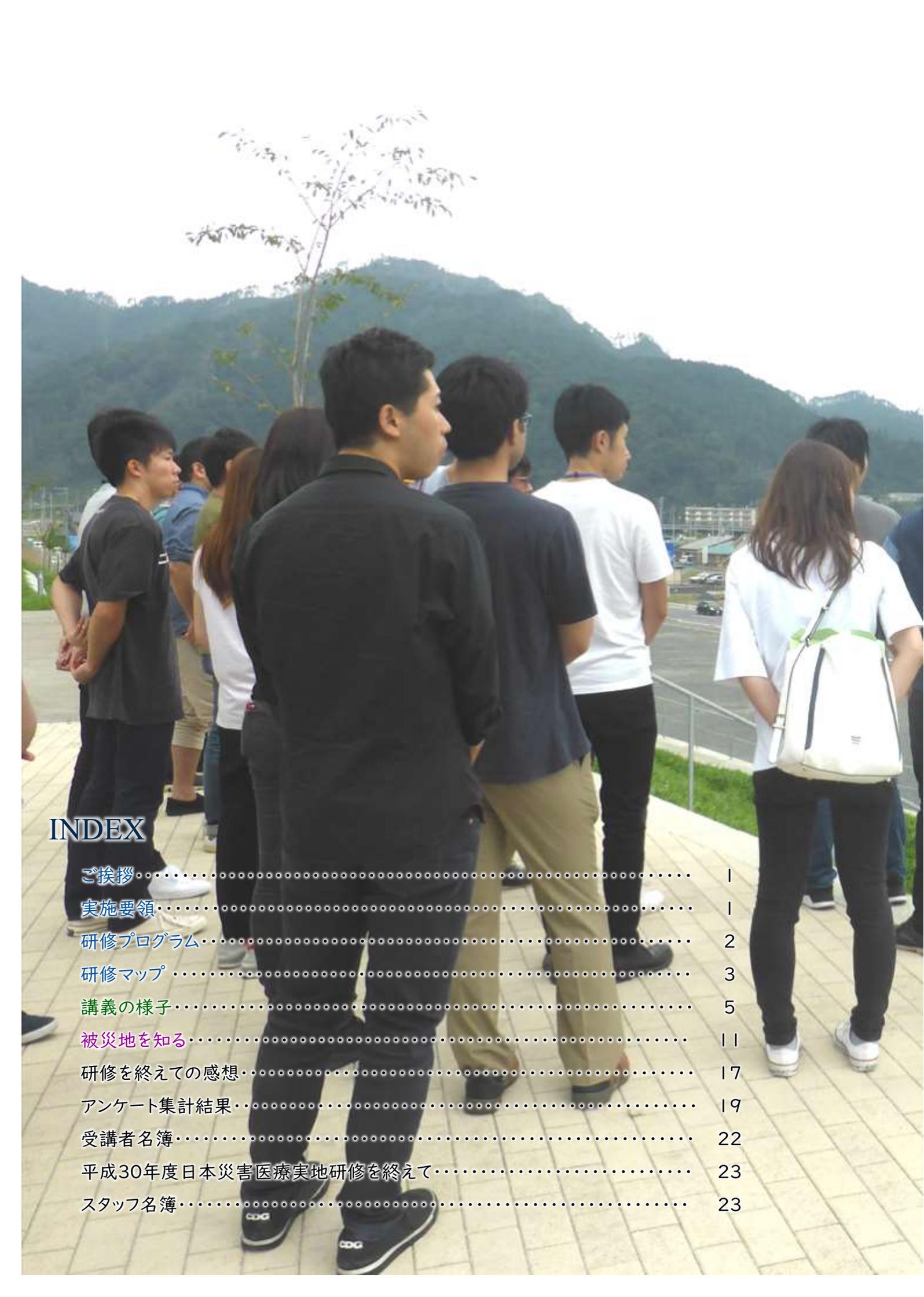
2018.9.6~7



岩手医科大学

災害時地域医療支援教育センター

Center for research and training on community health services during disaster



INDEX

ご挨拶	1
実施要領	1
研修プログラム	2
研修マップ	3
講義の様子	5
被災地を知る	11
研修を終えての感想	17
アンケート集計結果	19
受講者名簿	22
平成30年度日本災害医療実地研修を終えて	23
スタッフ名簿	23



研修開催にあたってのご挨拶

東日本大震災の発災を契機に、全国の臨床研修医の皆さんに災害医療について学んでいただくための研修として震災の翌年の平成25年度より毎年1回開催しているこの研修も、今回で第6回目を迎えることになりました。

今回も全国より23名の参加を頂き、遠くは広島から参加いただいております。広島といえば、つい先ごろ発生した西日本豪雨災害で、現在でも被災地ではご苦労をされていることと思います。今年は大阪府北部地震から、西日本豪雨災害、台風21号災害と西日本を中心に災害が発生していましたが、本日未明に北海道でかなり大きな地震があった模様です。皆さんも地震の揺れで目が覚めた方もいらっしゃるかもしれません。

このように近年日本中いっどこで災害が発生してもおかしくない状況ですし、近い将来必ず起きるであろう大規模災害に対して、今度は皆さんが医療人として対応を迫られることも充分考えられます。東日本大震災の発生から7年半が経過しておりますが、この研修で皆さんにお伝えする災害医療についての知識、被災地で活動された方々の経験談、被災地に実際に立って見聞きしていただく体験は、今後の皆さんが医療人として活躍される中で、一つの大きな糧になることと期待しております。

災害医療のエキスパートの先生方も多数呼びいたしております。無事に2日間の研修を終えられ、それぞれの現場でご活用いただくことを祈念いたしてご挨拶と致します。



岩手医科大学

災害時地域医療支援教育センター長

救急・災害・総合医学講座災害医学分野 教授

眞瀬 智彦

研修実施要領

1. 目的

平成23年3月11日に発生した東日本大震災・津波の被災地である岩手県沿岸部を訪れ、当時の対応や現在の状況を実際に見聞きし、臨床研修医や大学院生の立場から災害医療に対する考え方を学ぶ。

また、災害医学概論や机上シミュレーション等を通して災害医療に関する基礎知識を習得し、災害時に対応できる医療人の育成を目指す。

2. 開催日と開催場所

1日目 | 9月6日 (木) 9:00~17:35
岩手医科大学矢巾キャンパス
災害時地域医療支援教育センター

2日目 | 9月7日 (金) 7:30~16:30
岩手県沿岸部 (釜石市)

3. 研修対象と受講定員

全国の臨床研修医および医学系大学院生 24名

4. 研修内容

- 1日目 | 災害医療概論や机上シミュレーション、実習を通じた災害医療の基礎知識の習得
- 2日目 | 岩手県沿岸部の津波被災地 (釜石市) をバスで巡る。被災遺構の見学や現地の方に当時の様子、現在までの復興取組などについてご講演頂く。

5. 参加費

- 無料 但し、下記の費用は自己負担とする。
 - ◆勤務地⇔災害時地域医療支援教育センターまでの交通費及び宿泊費
 - ◆1日目、2日目の昼食代

6. 問い合わせ先

岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター
住所：〒028-3694 岩手県紫波郡矢巾町西徳田2-1-1
電話番号：019-651-5110 (内線 5563、5564)
FAX番号：019-611-0876
E-Mailアドレス：saigai@j.iwate-med.ac.jp



研修プログラム

■ 1日目

8:40 ~	9:00	会場受付
9:00 ~	9:05	開会の挨拶
9:05 ~	10:15	講義 災害時のメンタルヘルスケア 講師 千島 佳也子 (国立病院機構災害医療センターDMAT事務局 看護師)
10:15 ~	10:25	休憩
10:25 ~	10:55	講義 災害時の医療活動 講師 眞瀬 智彦 (岩手医科大学救急・災害・総合医学講座災害医学分野 教授)
10:55 ~	11:25	講義 慢性期における保健医療活動 講師 小早川 義貴 (国立病院機構災害医療センター災害医療部福島復興支援室 室長補佐)
11:25 ~	11:55	被災地を知る 釜石市: 岩手県立釜石病院 東日本大震災における三陸沿岸地域の被災状況と医療対応 講師 坪井 忠和 (岩手県立釜石病院 看護師長)
11:55 ~	12:55	昼食
12:55 ~	14:15	講義・実習 トリアージ 講師 忠地 一輝 (岩手県立胆沢病院泌尿器科人工透析科長兼災害医療科長)
14:15 ~	14:25	休憩
14:25 ~	14:45	講義・実習 災害時の情報通信 講師 藤原 弘之 (岩手医科大学救急・災害・総合医学講座災害学分野 助教)
14:45 ~	17:25	実習 がれきの下の医療 講師 小早川 義貴 (国立病院機構災害医療センター災害医療部福島復興支援室 室長補佐) シミュレーション 病院における災害時の初動と多数傷病者受け入れ 講師 高階 謙一郎 (京都第一赤十字病院 救命救急センター長)
17:25 ~	17:35	翌日 (研修二日目) の事務連絡

※2018年9月6日早朝に発生した北海道胆振東部地震対応のため、直前にプログラムの変更を余儀なくされ、受講された皆様には予定通りの研修進行とならず、少なからずご迷惑をおかけいたしましたことを改めてお詫びいたします。

■ 2日目

	7:30	盛岡駅西口集合
7:30 ~	9:30	バス移動 盛岡駅西口→国立病院機構釜石病院
9:05 ~	10:20	被災地を知る 釜石市: 独立行政法人国立病院機構釜石病院 大災害時に医療機関並びに医師はどう行動すべきか 講師 土肥 守 (国立病院機構釜石病院 院長)
10:20 ~	10:40	バス移動 国立病院機構釜石病院→釜石市役所
10:40 ~	11:30	被災地を知る 釜石市: 釜石市役所 東日本大震災における釜石の災害対応 講師 猪又 博史 (釜石市市民生活部唐丹生活応援センター 所長)
11:30 ~	12:50	自由時間 (昼食時間含む)
12:50 ~	13:20	バス移動 イオンタウン釜石→鶴住居地区
13:20 ~	13:40	被災地を知る 釜石市: 鶴住居地区 (釜石東中学校正門前) 講師 猪又 博史 (釜石市市民生活部唐丹生活応援センター 所長)
13:40 ~	16:30	バス移動 釜石市→盛岡駅西口 (道の駅 釜石仙人峠 休憩含む)
~	16:30	盛岡駅西口到着 解散

釜石市俯瞰図





講義の様子

講義

災害時のメンタルヘルスケア

災害後に生じるメンタルヘルスの問題にどのように向き合っていくべきなのかについて、独立行政法人国立病院機構災害医療センターDMAT事務局の千島先生よりご講義いただきました。

心理的応急処置（サイコロジカル・ファーストエイド：PFA）の方



法に則り、被災された方をどのように『見て』・『聴いて』、『つなぐ』のか、被災者のみならず、被災地で支援活動を行う方々に対しても、どのような対処をすべきなのかについて、熊本地震で千島先生が実際に経験された具体的な事例も交えながら、お話しいただきました。

講義後の質疑応答の際には、受講者の方からも通常業務での患者様との向き合い方等についての質問もあり、メンタルヘルスに関する関心の高さを感じました。



国立病院機構災害医療センター
DMAT事務局

千島 佳也子

講義

災害時の医療活動

災害時の医療支援についての概論について、岩手医科大学救急・災害・総合医学講座災害医学分野の眞瀬教授よりご講義いただきました。

災害医療と救急医療の違いや、CSCATTTなど、災害医療とはなにか？という概論的な内容をご説明頂いた後、日本の災害医療が発展するきっかけとなった阪神淡路大震災から岩手県における災害医療の取り組みを紹介。東日本大震災、熊本地震、岩手・北海道豪雨災害時の活動の具体例をご説明頂きました。

この研修で2日目に訪れる岩手県沿岸部の津波被災地の当時の被災状況

を改めて数字で確認するとともに、被災当日からのDMATを含む医療の活動の様子、被災した病院の様子などをご紹介いただくとともに、東日本大震災で露わになった課題点を提示していただきました。

熊本地震での医療活動の特徴や、岩手・北海道豪雨災害での医療活動を紹介するとともに、医療も含め、行政や消防・警察・自衛隊・保健福祉なども巻き込んだ多組織連携が可能な会議体構築の重要性と、急性期から中長期にわたる医療提供体制の考え方の重要性についてご説明頂きました。



岩手医科大学
救急・災害・総合医学講座
災害医学分野 教授

眞瀬 智彦



国立病院機構災害医療センター
災害医療部福島復興支援室
室長補佐 小早川 義貴

阪神淡路大震災以降、災害医療は発災直後の超急性期に爆発的に増加する医療ニーズに対し、如何に効率良く対処し、避けられた災害死を減らすかという点で発展・整備されてきました。しかし、東日本大震災・熊本地震では、急性期の医療ニーズよりも、避難生活が長期化することによる災害関連死や慢性期の保健医療活動のニーズ増大などがクローズアップされ、災害医療のあり方が多様化ははじめています。

国立病院機構災害医療センターの小早川先生は、東日本大震災後に設立された福島復興支援室という災害

医療の専門機関のメンバーとして、現在に至るまで継続的な支援活動を行われています。また、熊本地震でも被災地内で長期に亘り活動されており、それらの体験談も交えながら、慢性期における保健医療活動についてご講義頂きました。

被災地、被災者の間や、受援者との間で発生する摩擦への対処。役員職員等の危機介入者への対応など、『道聞かれ顔』というキーワードも交え、ご説明頂きました。



岩手県立胆沢病院
泌尿器科人工透析科長
兼 災害医療科長
忠地 一輝

医療におけるトリアージについて、岩手県立胆沢病院の忠地先生よりご講義いただきました。

一次トリアージのSTART法と二次トリアージのPAT法の具体的な説明の後、実際にトリアージのデモをしながらトリアージタグを記載してみる実習を行いました。現場や移動中の車内を想定し、タグを手に持った状態で記載するなど、現実に即した形で記載すると、文字の書き難さを体感することができたと思います。

その後、2名1グループに分かれ、PAT法によるトリアージ実習を行いました。

短い時間で傷病者に取り付き診察をしながらカテゴリーを決めなければならない状況に、最初は受講者の先生方も戸惑っていましたが、回数を重ねるごとに、早く正確にカテゴリーを決めることができるようになりました。



傷病者に接触し、声をかける



傷病者を診察し、PAT法に基づいてカテゴリーを決める

講義・実習

災害時の情報通信

災害時の情報通信というテーマについては、使用方法を説明したのち、一人ずつ実機を使用した通信実習を行いました。

冒頭のスライドでは、東日本大震災の津波被災地に先生がヘリコプターで被災状況の確認のためにフライトした際に撮影した被災地の様子などもご提示いただき、インフラが壊滅している様子を見ることができました。

この後の実習『がれきの下の医療』で実際に使用するトランシー



岩手医科大学
救急・災害・総合医学講座
災害医学分野 助教

藤原 弘之

シミュレーション

病院における災害時の初動と
多数傷病者受け入れ

京都第一赤十字病院の高階先生より、CSCATTTに基づいた対応について、再度おさらいの講義を頂いた後、病院勤務中に非常に大きな地震が起きたという想定で、病院のマップを机上に広げながら初動対応のシミュレーションを行いました。

病院職員として何をしなければならぬのか、災害対策本部を立ち上げ、どのような情報を収集し、どのように方針を決めて活動すべきなのかをグループごとにディスカッションしました。また、病院に多数の傷病者が押し寄せて来たことを想定し、病院内に指揮所やトリアージ

エリア、緑・黄・赤・黒の診療エリアをレイアウトし、患者の動線を検討。医師、看護師、事務員、警備員の配置と役割を決めて、効率よく患者を診療できるかを検討しました。

臨床研修医という立場としては、今回の研修で一番遭遇する可能性の高いシチュエーションでもあり、受講された先生方も自分の所属されている病院や通常の勤務状態を重ね合わせながらシミュレーションに臨まれていたようです。



京都第一赤十字病院
救命救急センター長

高階 謙一郎



院内のマップの上にレイアウトした各診療エリアに人員を配置する受講者



国立病院機構災害医療センター
災害医療部福島復興支援室
室長補佐 小早川 義貴

国立病院機構災害医療センターの小早川先生より、災害時における Preventable Deathを無くすために、救助活動中からの医療活動の必要性を説明していただいたのち、がれきの下の医療（CSM：Confined Space Medicine）について説明を頂きました。

ヘルメットなどの装備を身につけた後、グループごとに災害対策本部で状況の確認と通信手段を確保。現場で救助活動中の消防隊員の指示のもと、列車脱線事故で倒壊した沿線の住宅内に取り残された傷病者に接触するという想定で、がれきの施設

内で活動を開始しました。

暗く狭いがれきの中を進み、下半身をがれきに挟まれ救助を待つ傷病者に接触。トリアージ・診察を実施し、患者の状態をトリアージタグに記載。また、災害対策本部に患者情報や、この後の治療に必要と思われる資器材をトランシーバーで連絡しました。

しばらくすると、消防隊員より倒壊の危険があるということで撤退命令が下ります。患者を現場に残しながら緊急退避を行いました。



実習開始前に、小早川先生よりCSMの説明を受ける。



消防隊員から現場の状況について説明を受ける。



傷病者と接触したことをトランシーバーで報告。



患者情報をトリアージタグに記載しながら、トランシーバーで災害対策本部に連絡をする受講者







被災地を知る

**東日本大震災における
三陸沿岸地域の被災状況と
医療対応**

東日本大震災発災時に大津波による多大な被害を受けた釜石医療圏。その中で唯一の災害拠点病院である岩手県立釜石病院で、当時より勤務されている坪井看護師長に当時の様子を語っていただきました。

隣の大槌町は1病院5診療所と役場が全滅。釜石市も6病院中3病院、18診療所中14診療所が被災。県立釜石病院は海から離れていたため津波の被害からは難を逃れるものの、耐震補強工事を行う直前での被災により、病棟が倒壊する恐れがあるため使用できず、総床272のうち246床を失いながら、205名の入院患者の

安全を確保しなければならない事態となり、入院患者を雪のちらつく駐車場に院外避難させ、その後安全が確認された外来棟に移しますが、野戦病院のような様相となります。

職員の大半も被災し、家族の安否も確認できないまま勤務継続を強いられ疲弊していく中、壊滅状態の釜石医療圏の医療体制の復旧の拠点として、外部からのDMAT、医療救護班の受け入れや、内陸の隣接医療圏と連携した患者搬送等々のミッションを悪戦苦闘しながらも病院職員一丸となって乗り切った体験談をお話いただきました。



岩手県立釜石病院
看護師長

坪井 忠和

**大災害時に医療機関並びに
医師はどう行動すべきか**

東日本大震災発災当時の様子を、院長の土肥先生にお話いただきました。

国立病院機構釜石病院は、釜石市の中心部から離れた南西の山間に位置しており、施設の被害は比較的少なかった病院です。しかし、インフラは途絶し、スタッフも多数被災してしまいました。

釜石医療圏の医療機関が壊滅的なダメージを受ける中、比較的被害が少なかった釜石病院は、被災した医療機関の支援、外部からやってくるDMAT・医療救護班の受け入れやマネジメント等を行い、医療圏の復

興を下支えしました。

東日本大震災での体験を基に、医療機関として、医師として、平時からどのようなことに心がけ、準備をしておくべきなのかについて、様々な角度から検証されたご提案をしていただきました。

熊本地震や大阪市北部地震、西日本豪雨に昨日発災した北海道胆振東部地震など、日本中いたるところで頻発する自然災害。いずれ訪れるであろう南海トラフ地震や首都直下地震に向けて、どのような準備をすべきなのか。その一助を示していただけたかと思います。



独立行政法人国立病院機構
釜石病院 院長

土肥 守



釜石市の復興状況を説明する土肥院長先生



土肥院長先生に質問する受講者



集合写真の後に藤原先生と談笑する土肥院長先生



最後にお見送りいただいている土肥院長先生



東日本大震災における
釜石の災害対応

震災当時釜石市の職員として震災
に向き合っていた猪又さんに、
行政の立場から見る災害対応について
お話しいただきました。

釜石市を含めた岩手県沿岸部は、
過去にも数度の津波による被害を
受けており、かねてよりその対応を
ハード・ソフト両面から実施して
きました。しかし、東日本大震災では
10m弱の津波に襲われ、市街中心部
は水没。釜石市役所も入口のまさに
目の前まで津波が押し寄せる状況と
なり、孤立します。

あらためて被害の状況とその後の
対応について、映像を交えてご説明

頂きました。
その後、釜石市役所庁舎の屋上に
移動し、釜石市中心部を一望しなが
ら当時の被災の状況を説明頂きまし
た。また、市役所に津波が迫る動画
をまさにその位置に立って見るこ
とで、当時の状況を追体験するこ
とができたかと思います。

午後からは鶴住居地区に移動し、
中学生が小学生と近隣住民の手を引
いて高台に逃げ難を逃れ、釜石の奇
跡と呼ばれた場所で、猪又さんに当
時の状況をご説明頂きました。



釜石市市民生活部
唐丹地区生活応援センター 所長
猪又 博史



釜石市役所を正面から



市役所前を移動する受講者の皆さん





市庁舎屋上より当時の様子を説明する猪又さん 左側が釜石湾



釜石市庁舎：入口の階段下まで津波が到達



市庁舎屋上にて



市庁舎直下の市街地



山側の様子 災害公営住宅が建設されている



庁舎裏のお寺 当時は避難場所となった



釜石港の様子



鵜住居小学校・釜石東中学校入口から鵜住居地区を望む 正面が復興スタジアム（旧鵜住居小学校・釜石東中学校跡地）



釜石市庁舎：入口の階段下まで津波が到達



復興が進む鵜住居地区



鵜住居地区を歩いて移動する受講者の皆さん



鵜住居小学校・釜石東中学校入口の階段を登る



鵜住居地区の状況を説明する猪又さん



ローカルテレビの取材を受ける受講者



正面奥が太平洋 足元まで津波が押し寄せたため、現在でも更地が目立つ鶴住居地区



復興スタジアムのスタンドが見える



鶴住居地区を望む受講者の皆さん



研修を終えての感想

浅井 俊成（岩手医科大学附属病院）

7年前の震災の日、まさか東北の岩手に来るとは、働くことになるとは全く考えておらず、どこか遠い所のことだと思っていました。かなり経った今も、まだ復興中なのだと身をもって実感しました。今後災害とどのように関わるのかは分かりませんが、今回のことを頭の片隅に置いておこうと思いました。

朝岡 元気（近江八幡市立医療センター）

研修当日の朝、北海道で震災が起こった中、予定通り研修を行っていただき、ありがとうございました。考えてみると、7年前の3.11の後も熊本地震、九州北部、西日本豪雨など、明日にでも自分が当事者となるかも…と改めて考えさせられた中で受講することができました。

今回、東日本の際に対応された先生の講義を受け、実際の地で目にする中で、医療者・医師としての視点や考え方、そしてどう動くべきか、どう対応すべきかを学ぶことが出来ました。またがれきの下でのシミュレーションはDMAT隊員の現場を少しでも体験することができ、とても興味深い体験となりました。

最後に、このような貴重な機会を頂きありがとうございました。

岩崎 史（岩手県立胆沢病院）

災害医療の実情についての講義を受けたり、デモンストレーションを体験することができ、こういう医療活動もあるのかと大変勉強になった。出身大学の立地上、東日本大震災について宮城県内という枠の中で講義を受けたり実習をすることはあったが、岩手県という枠で講義実習を受けたことが無かったため、大変勉強になった。

小笠原 光矢（岩手県立胆沢病院）

今回は2日間という短い期間でしたが、市役所側からの立場、被災地で医療を行ったものとしての立場、DMATとしての立場、いろんな立場より話を聞くことが出来て、大変勉強になりました。また、被災地を見ることができたのもいい経験となりました。

実際にトリアージの練習をしたり、2分間で全身状態を素早く評価する練習をしたのも、これから生きていくと思えます。これからいつこのような災害がまた起こるかかわからないので、いつでも実践できるよう日々意識していこうと思えます。

岡村 祐太郎（済生会横浜市東部病院）

2日間、とても有意義な実習をありがとうございました。医師になったからには何科に行ったとしても救急時・災害時には少しでも力になりたいという思いで参加させていただきました。そのため、これまでもBDLSやADSLといった勉強会に参加してきました。今回学んだこと、感じたことを忘れないうちに刻み、医療と向き合っていこうと思えます。

奥坊 斗規子（国立病院機構 福山医療センター）

実際に被災地に行き、生の声が聞けてとても良かった。今回参加しなかったら、災害の大変さをここまで実感できていなかったと思う。がれきの下の医療で、ヘルメットやトランシーバーを使用し、DMAT等の行動がとても大変であることを学んだ。

今回の研修で、もし実際に災害が起こった場合、いち早く行動できると思う。

清川 哲郎（岩手医科大学附属病院）

私は、一度、被災地を自分の目で見たいという思いがあったのでこの研修に参加しました。2日目に実際に被害を受けた地に行くことができ、来て良かったと思いました。また、それまでや移動中にも、災害時に活躍された先生方の生の声を聞き、具体的に思いの詰まったお話を聞くことができ、とても刺激を受けました。災害医療に関しては、説明を受けるだけでなく、シミュレーションや実技も取り入れられており、ただ聞くだけでなく体を動かして体験したことで、より多くのことを学べたと思います。実際にやってみると難しく、自分でやるのは自信がないと思うことがたくさんありました。特にがれきの下の医療では、思った以上に体が動かず手間取りました。しかし、それを合せて今回経験したことが自分の引き出しとなり、何らかの形で役に立つと良いと思いました。

金野 寛史（岩手県立中部病院）

学生の頃にも災害医療について学ぶ機会はあったが、医師になってから改めて講義・実習に参加すると、より身近なもの、今後自分も関わっていくものとしてより現実感を持って取り組むことが出来た。

災害が発生し実際に行動しなくてはいけないとき、どうすればよいかイメージするのが難しかったが、大まかな流れ、求められることなどについて学べたことで不安が減り、より詳しく自分でも学んでいきたい。

古賀 千夏（岩手県立宮古病院）

今回、災害医療について実際の被災地に訪れ、生の声を聞き、学ぶことができると知り、参加させていただきました。折しも、北海道胆振東部地震発生後の慌ただしい雰囲気の中での研修となりました。北海道に住む友人の安否確認メールの返事を待ちながら座学を受け、がれきの下での救助体験を行いました。北の地では、今まさにこのように救助を待っている人がいるのかと、全てが真に迫って感じられました。釜石では、被災当時の体験を聞くことができ、日頃からの備えの大切さ、災害が起こってしまった際の動き方をシミュレーションしておくことの重要さなどを痛感しました。医師としてどう動くべきなのか、常日頃から意識しておかなければいけないのだと実感できた、有意義な2日間でした。ここで学んだことを忘れず、弛まず、医師として成長していけるよう努力していきたいです。2日間大変お世話になりました。本当に、ありがとうございました。

坂井 志帆（岩手県立中部病院） 今回の研修では実際に日本の災害医療に携わっている先生方からの貴重なお話を聞くことができ、現場ではどのようなことを考え、どういう点に注意して行動しているのかを具体的にイメージすることが出来ました。また実際にトリアージPAT法なども実践することができ、貴重な経験となりました。今回のためにたくさんの準備をしてくださった方々、ありがとうございました。

坂口 俊（岩手医科大学附属病院）

学生時代の講義からさらにステップアップした内容で、大変興味深かった。先生方が多忙な中、時間を割いて教えて下さり、大変ありがたく感じる。内容が災害と言うことで範囲が膨大なため、2日間の研修では教えきることに限界があると感じる。先生方の多大な労力も伺える。しかし、単純な「被災地に行く研修」になってしまうと、おそらく興味本位の研修医が参加し、年数を重ねるごとに県外からの参加は少なくなっていくと想像できる。研修を岩手の強みとして打ち出していくのであれば、さらに掘り下げ、“体験”から“身になるスキル”の研修であればと感じる。

清水 潤（岩手県立胆沢病院）

今回研修を通してリアルな災害医療の現場を知ることができた。東日本大震災の日は仙台にいて被災した。電気、ガス、水道のインフラが停止したが命の危険も感じることはなく、沿岸の被災地の状況はテレビを通じて得た情報がほとんどだった。その後、大学の講義で各先生方から震災時の話は聞いていたが、リアルなイメージは出来なかった。今回の研修を通して震災時の状況を知り、また、その時に医師としてどういふことをしなければならぬかという一端を学ぶことが出来た。今後災害があった時に今回の経験を活かしたい。

瀬川 将史（順天堂大学医学部附属静岡病院）

東日本大震災で実際に現場で仕事をされた医師、看護師、役場の方々から直接話を伺うのは初めてで貴重な機会となりました。中でも県立釜石病院の話は印象的で、被災もあって資源も設備も不十分な中、以前より行っていた防災対策・訓練でCSCAが上手くいき、病院スタッフとDMATが協力し最大限の結果に近づけたことから多くの点を学べると感じました。将来自分が災害に関わることは十分に考えられ、それに対する準備を高い意識をもって行っていく必要を感じました。

高橋 卓也（岩手県立中部病院）

岩手出身のため、震災についてはよくわかっていると思っていたが、初めて知ることが多く、また医療者の視点で見た震災の話を聞いて良かった。シミュレーションを通して実際の動きを学ぶことが出来たが、いざやってみるとうまくいかず勉強不足を痛感した。今後自分の病院に災害関係で患者が運ばれてきた際は、この2日間で学んだことを活かせるようにしていきたい。

平井 英祐（岩手医科大学附属病院）

震災1年後に釜石、大槌に行った時に比べ、かなり復興は進んだと感じました。トリアージなど知識としてはあったものでも、がれきの下の実習でやったときはうまく情報を聞くことが出来なかったため、実際の震災にあった時に行った先生方の大変さがわかりました。今後、大規模災害が起こる可能性はあり、その時に自分がどのように関わっていくべきか考えるいいきっかけになったと思います。

宮本 一宏（岩手医科大学附属病院）

東日本大震災に関して、自分自身が直接被害を受けた訳ではないため、どちらかと言うと他人事である所がありメディアでしか情報を取り入れていなかったが、今回の研修で直接見て、聞いたことでより実感することができ、今後医師としての立ち振る舞い方に影響を与えるものになりました。また、全国から同期の研修医が集まり話をすることでとても刺激になりました。

村上 皓彦（岩手県立胆沢病院）

今回の研修では普段行っている医療行為が災害現場ではいかに難しいかということが分かりました。出来ているつもりなのが出来ない、その中でも出来ることを探して動かなければいけない状況にいざ置かれた時どうするか、改めて考え直すいい機会になったと思います。被災地を見学し、いかに多くの人が復興に尽力してきたかが分かりました。この先医師として少しでも復興に関わることができればと思います。貴重な体験をありがとうございました。

村松 賢一（順天堂大学医学部附属静岡病院）

1日目は災害医療に関する講義やシミュレーション実習中心で、講義では災害が起きた場合どのように病院、医師が行動しなければならぬか、シミュレーターを使っての災害現場で行うトリアージや連絡を取るなどの難しさを感じました。実際の現場では、もっと難しい状況や混乱する状況になることが多いため、常にこのような現場を意識したシミュレーションを数多く経験しておくべきだと感じました。

2日目は、実際に被災された方の話や現場を見ることによって、被災から7年も経っているがまだ工事中の現場だったり、被災された方の中に地震というものが大きく心に残っているのが感じられ、本当に復興するにはすごい時間が必要であると痛感させられました。

この実習を通して感じたことは、災害の現場では一人でできることには限界があり、いつも以上に多職種の方々と協力して活動することが重要であると感じました。また、北海道地震の対応で忙しい中、このような機会を設けて下さった職員の方々、先生方には厚く御礼申し上げます。

八鍬 一博（岩手医科大学附属病院）

2日間の研修は大変充実した内容で、参加させていただくことができたことに感謝しております。様々な立場から災害医療に携わる医師・看護師・自治体職員の方からお聞きするお話は、阪神・淡路大震災や中越地震、東日本大震災など実際に経験されたエピソードも交え、記憶に残るものばかりでした。実習においては、机上シミュレーションでトリアージエリアを院内外にどのように配置するか考える研修があり、実際の現場でどのようなことが行われているか知り、興味深かったです。

2日間通してお世話になりました災害時地域医療支援教育センターの方々に感謝します。

山本 悠（岩手県立胆沢病院）

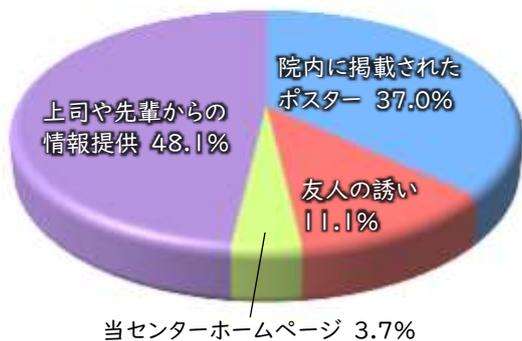
今回初めて災害医療実地研修に参加させていただきましたが、東日本大震災などの体験談や医療者としての話など普段聞けないような貴重なお話を聞くことが出来たととても充実した研修になりました。実際に釜石へ行って、釜石市役所の屋上で津波の動画を見ながら景色を眺めてみて、津波の恐ろしさが前よりももう少し想像できて、いい経験になりました。日本は災害大国というお話を聞き、これから先も大きな災害があるのだろうなということで、今回のトリアージなどの経験を忘れず、自分も医療者として災害時に何かできるように準備しておきたいと思います。

本当に研修に参加できて良かったです。ありがとうございました。

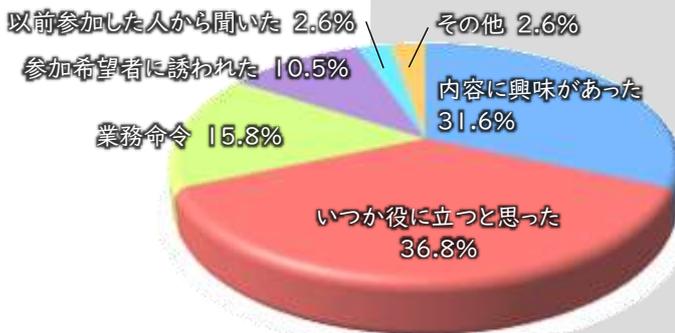
アンケート集計結果

【アンケート回答者数 23名】

1. 今回の研修について、どのようにして知りましたか？
(複数回答可)



2. 受講した動機についてあてはまるものすべてに☑してください。(複数回答可)



3. 研修への参加は出張扱いですか？



4. 今回の研修に参加するにあたり、所属病院から交通費の支給はありましたか？



5. 研修それぞれの感想について、以下の選択肢からお選びください。

■ 強く思う ■ やや思う ■ どちらともいえない ■ あまりそう思わない ■ まったくそう思わない

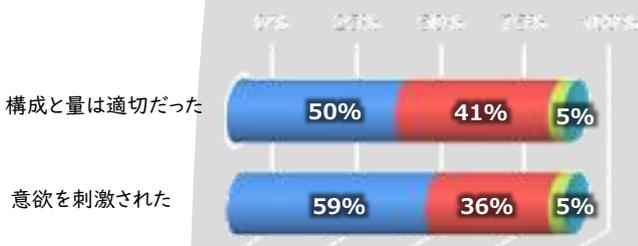
■ 講義 | 災害時の医療活動

岩手医科大学 救急・災害・総合医学部講座災害医学分野
教授 眞瀬 智彦



■ 講義 | 慢性期における保健医療活動

国立病院機構災害医療センター
災害医療部福島復興支援室 室長補佐 小早川 義貴



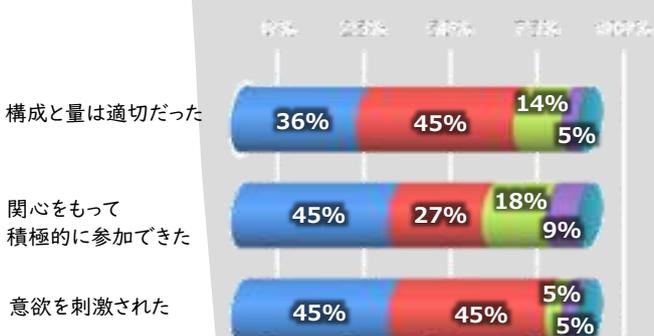
■ 講義 | 東日本大震災における三陸沿岸地域の被災状況と医療対応

岩手県立釜石病院 看護師長 坪井 忠和



■ 机上シミュレーション | 病院における災害時の初動と多数傷病者受け入れ

京都第一赤十字病院 救命救急センター長 高階 謙一郎

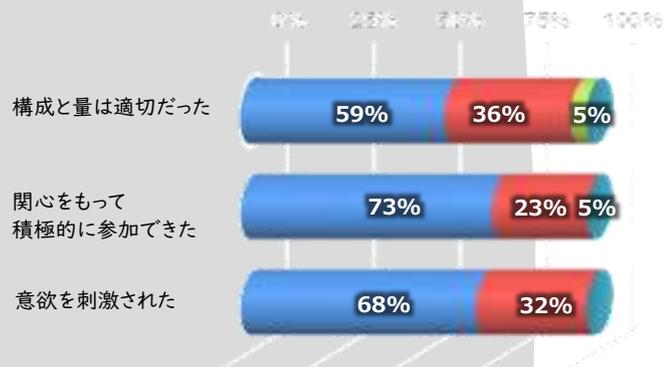


■ 強く思う ■ やや思う ■ どちらともいえない ■ あまりそう思わない ■ まったくそう思わない

■ 講義・実習 | トリアージ

岩手県立胆沢病院

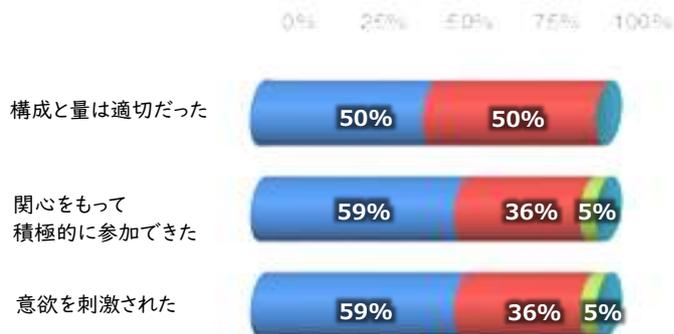
泌尿器科人工透析科長 兼 災害医療科長 忠地 一輝



■ 講義・実習 | 災害時の情報通信

岩手医科大学救急・災害・総合医学講座災害医学分野

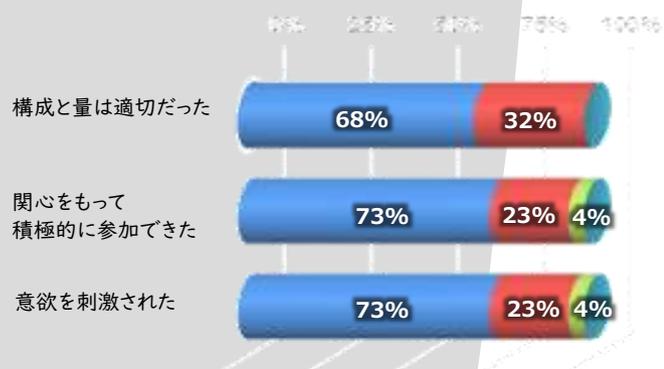
助教 藤原 弘之



■ 実習 | がれきの下の医療

国立病院機構災害医療センター

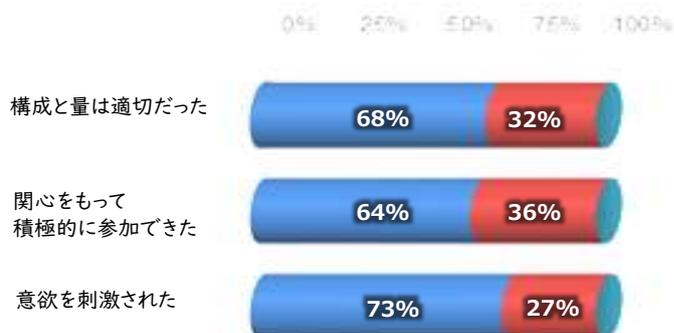
災害医療部福島復興支援室 室長補佐 小早川 義貴



■ 講義 | メンタルヘルスケア

国立病院機構災害医療センターDMAT事務局

看護師 千島 佳也子



1. 【研修1日目】改善してほしいことをご自由にご記入下さい。

- 内容が詰め込みすぎて、もう少し余裕があってもよかった。(2日に分けるなど)
- 空調がかなり寒くてつらかった。
- トリアージの実技形式の時間を増やしてほしい。
- もっとディスカッションがあってよかったと思う。
- がれきの下は思ったより短かった。
- 折角なので北海道について現在進行形で行っていることを教えて欲しかった。
- 受講時間が長く感じる講義があった。
- 特にない。(4名)

2. 【研修1日目】良かったことをご自由にご記入下さい。

- 全体的に興味深い内容だった。二次トリアージが災害現場以外でも活用できる実習内容で、特に有意義だった。
- メンタルヘルスは実例を交えての発表でとても勉強になった。
- 実際にやってみることができて良かった。
- がれきの下へのシミュレーションはなかなか体験できるものではなかった。各シミュレーションは院内研修の復習となった。
- がれきの下の医療で実際に体験することができた。
- 普段こういう体験は出来ないのが参加できてよかった。
- トリアージやがれきの下など実習があって役に立った。
- 短い時間で多様な講義があってよかった。

2. 【研修1日目】良かったことをご自由にご記入下さい。(つづき)

- がれきの下の医療が思ったより難しいのだということを実感できた。
- 実際のDMATの活動内容を知れて良かった。
- 構成がよく練られていると思った。
- 実際に最後体験していかにか難しいか実感できた。
- 全体。
- リアルな災害医療を知れたこと。
- 実際にヘルメットなどを装備して実習したこと。
- 「がれきの下の医療」で知識で知っているのと実際の狭い環境で実践することの違いを感じた。もっと普段から意識を変えていきたいと思った。
- がれきの下の医療を研修できたこと。
- スタッフの方々とてもやさしくてよかった。



震災時にご協力いただいた岩手県北バスさん



車窓から見える景色を説明する藤原先生



氏名 (五十音順)	所属・職名	職名	都道府県	
浅井 俊成	あさい よしなり	岩手医科大学附属病院	1年次臨床研修医	岩手県
朝岡 元気	あさおか げんき	近江八幡市立医療センター	1年次臨床研修医	滋賀県
石亀 慎也	いしがめ しんや	岩手県立中部病院	1年次臨床研修医	岩手県
岩崎 史	いわさき ちかし	岩手県立胆沢病院	1年次臨床研修医	岩手県
小笠原 光矢	おがさわら こうや	岩手県立胆沢病院	1年次臨床研修医	岩手県
岡村 祐太郎	おかむら ゆうたろう	済生会横浜市東部病院	2年次臨床研修医	神奈川県
奥坊 斗規子	おくのぼう ときこ	独立行政法人福山医療センター	1年次臨床研修医	広島県
清川 哲郎	きよかわ てつろう	岩手医科大学附属病院	1年次臨床研修医	岩手県
金野 寛史	きんの ひろふみ	岩手県立中部病院	1年次臨床研修医	岩手県
古賀 千夏	こが ちなつ	岩手県立宮古病院	1年次臨床研修医	岩手県
斉藤 美有	さいとう みゆ	岩手県立胆沢病院	1年次臨床研修医	岩手県
坂井 志帆	さかい しほ	岩手県立中部病院	1年次臨床研修医	岩手県
坂口 俊	さかぐち しゅん	岩手医科大学附属病院	1年次臨床研修医	岩手県
清水 潤	しみず じゅん	岩手県立胆沢病院	1年次臨床研修医	岩手県
瀬川 将史	せがわ まさふみ	順天堂大学医学部附属静岡病院	1年次臨床研修医	静岡県
高橋 卓也	たかはし たくや	岩手県立中部病院	1年次臨床研修医	岩手県
平井 英祐	ひらい えいすけ	岩手医科大学附属病院	1年次臨床研修医	岩手県
宮本 一宏	みやもと かずひろ	岩手医科大学附属病院	1年次臨床研修医	岩手県
村上 皓彦	むらかみ あきひこ	岩手県立胆沢病院	1年次臨床研修医	岩手県
村松 賢一	むらまつ けんいち	順天堂大学医学部附属静岡病院	1年次臨床研修医	静岡県
八鍬 一博	やくわ かずひろ	岩手医科大学附属病院	1年次臨床研修医	岩手県
山本 悠	やまもと はるか	岩手県立胆沢病院	1年次臨床研修医	岩手県
熊谷 優大	くまがい ゆうだい	東北大学医学部医学科	医学部6年生	宮城県



平成30年度 日本災害医療実地研修を終えて

日本災害医療実地研修を終えて一言申し上げます。

研修日初日の未明に発災した北海道胆振東部地震により、直接的な被害こそなかったものの、講師の被災地派遣などの影響で、研修プログラムの急遽変更などが発生し、受講者の皆さんには多大なご迷惑をおかけ致しましたことを、まずはお詫びいたします。そのような状況ではございましたが、天気にも恵まれ、無事に2日間の研修を終えることができましたことに感謝いたしております。

今年は草津白根山の火山噴火や大阪市北部地震、西日本豪雨災害など、日本各地で立て続けに自然災害が発生しており、例年になくDMATの出動する機会が増えております。これは、自らが当事者となって災害と向き合わなければならない可能性が高まっているとも言えないでしょうか。今回の研修では、災害医療に興味を持った者が集まり、意見を交わし人間関係を構築することができたかと思えます。研修で得た知識・経験・人脈が少しでも皆さんの今後の人生の糧としてお役に立つものであれば幸いです。

最後にご講演頂いた講師の皆様、また研修にご協力いただいた皆様に感謝申し上げますとともに、来年度も本研修を引き続き開催したいと考えておりますので、ご協力の程、よろしく願いいたします。

岩手医科大学 救急・災害・総合医学講座 災害医学分野 教授
眞瀬 智彦



講師・タスク・スタッフ一覧

氏名	所属・職名
眞瀬 智彦	ませ ともひこ 岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター長 兼 救急・災害・総合医学講座災害医学分野 教授
土肥 守	どい まもる 独立行政法人国立病院機構釜石病院 院長
高階 謙一郎	たかしな けんいちろう 京都第一赤十字病院 救命救急センター長
小早川 義貴	こはやかわ よしたか 独立行政法人国立病院機構災害医療センター災害医療部福島復興支援室 室長補佐
猪又 博史	いのまた ひろし 釜石市市民生活部唐丹地区生活応援センター 所長
忠地 一輝	ただち かずき 岩手県立胆沢病院 泌尿器科人工透析科長 兼 災害医療科長
千島 佳也子	ちしま かやこ 独立行政法人国立病院機構災害医療センターDMAT事務局 看護師
坪井 忠和	つばい ただかず 岩手県立釜石病院 看護師長
中村 舞	なかむら まい 岩手県立中部病院 看護師
大沢 聖	おおさわ ひじり 岩手県立久慈病院 看護師
金子 拓	かねこ たく 岩手医科大学附属病院 看護師
北田 成沙	きただ なりさ 岩手医科大学附属病院 看護師
藤田 友嗣	ふじた ゆうじ 岩手医科大学救急・災害・総合医学講座救急医学分野 講師
藤原 弘之	ふじわら ひろゆき 岩手医科大学救急・災害・総合医学講座災害医学分野 助教
藤原 淳一	ふじわら じゅんいち 岩手医科大学矢巾キャンパス教務課長
蒲澤 優	がまさわ まさる 岩手医科大学矢巾キャンパス教務課 災害時地域医療支援教育センター担当事務員
奥野 史寛	おくの ふみひろ 岩手医科大学矢巾キャンパス教務課 災害時地域医療支援教育センター担当事務員
高須 翠	たかす みどり 岩手医科大学矢巾キャンパス教務課 災害時地域医療支援教育センター担当事務員
伊藤 友香子	いとう ゆかこ 岩手医科大学救急・災害・総合医学講座災害医学分野 秘書



鵜住居駅周辺 いまだに更地が目立つ



釜石市役所の分庁舎 2階床上まで浸水している



国道45号線沿いの津波慰霊碑



バスの車窓から見た両石湾



国道45号線の津波浸水区域の標識



根浜海岸付近の松林

平成30年度 日本災害医療実地研修 報告書

発行日 : 2018年10月5日
 編集／著者 : 岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター
 発行所 : 岩手医科大学
 〒020-8505 岩手県盛岡市内丸19-1
 Tel.019-651-5111 (代表)
 連絡先 : 岩手医科大学 矢巾キャンパス教務課
 災害時地域医療支援教育センター担当
 〒028-3694 岩手県紫波郡矢巾町西徳田第2地割1番地1
 Tel.019-651-5110 (内線 5564)
 E-mail. saigai@j.iwate-med.ac.jp

※ 無断転載を禁じます



平成30年度 **日本災害医療実地研修 報告書**
岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター

